

巻 頭 言

賢いクルマを目指して

専務取締役

竹 鼻 俊 夫



限られた道路を多くのクルマが渋滞もなく、目的地まで最適な経路で走行できる自動車走行管制システムの開発が各国で開始されてから20年近い年月が経過した。成果も認められつつあり、実用化の時期も近いと期待しているが、その間、世界各国の主要都市は程度の差こそあれ、交通渋滞は解決されず、むしろ悪化傾向にある。特に道路整備の遅れているわが国は深刻な社会問題となっている。私の知る限り唯一の例外はシンガポールで、ここは都心に乗り入れられるクルマの数量が制限され、きびしい監視の中で秩序が維持されている。確かに都心の交通は快適で自動車の価値も高いが、新しいクルマを持ちたい多くの人達が乗り入れの権利を待っていると聞くと考えさせられる。

テン技報24号は自動車のインテリジェント化について当社が10数年来、開発して来た関連技術の小特集としてまとめたもので、東大の井口教授と富士通の神田常務理事に玉稿をいただいたことを心より感謝する次第である。

最近「マルメディア」が世間の関心を高め、クルマのインテリジェント化にも有効であると認められ、ビジネスからエンターテイメントまで広い範囲にわたって開発が進められている。最近、急速に普及が進んでいるカー・ナビゲーション機器も広い意味でのマルチメディアであり、前述の自動車の最適走行システムからの動的な情報が加わると渋滞解消にも役立つと期待されている。

1995年3月、大阪で開催される「国際ハイテク・フォーラム大阪'95」の企画委員会（委員長 大阪府大 津村教授）に出席する機会があったが、テーマは「先進ナビゲーション技術」副題～自動車・作業機械から人の移動に貢献するエスコートシステムまで～となっており、体の不自由な人も含め親切的ナビ・ロボットシステ

ムも討論されることになっている。

それについて、思い出すのは、数年前わが国でも放映された米国のSFテレビ番組で電波レーダとか赤外線センサを搭載し、中央の情報センターとマルチメディアでつながったとても賢いクルマが登場し、悪者を追跡する番組がある。この賢いクルマは単に高度な機械装置として動作するのではなく、ひとつの思考力があり、追跡している犯人のデータをマルチメディアを介して瞬時に入手、解析することもあって、ロボットにあり勝ちな冷酷な行動を取らないで、相手の心情も考えた人間性？のある判断をする所がさわやかで印象深く残っている。

前述のエスコート用ナビの一つにロボット付盲導犬が考えられており、主人の意志を理解できるレベルまで訓練された犬とナビの機能を持ったミニロボットで人と犬との間を補完するシステムであり経済的にもメリットが大きいと期待されている。訓練された盲導犬そのものをロボットで実現することは不可能に近いし、また、きめられた場所を訓練で覚えさせた盲導犬を育成することも大変な費用と労力をともなう。

自動車と犬を同じに扱うわけではないが、知能を持った賢いクルマを実現し都市の交通に役立てるには、ドライバとしての人間とクルマの間に介在するマルチメディアの在り方について重要な示唆を与えてくれる話である。

今後、われわれが目指すべき、自動車関係のマルチメディア機器は賢くて、人に優しいシステムであって欲しいと願う次第である。

